

寄書

○積年の習慣を破るべし (二) 東京婦人 佐々木よ

積年の習慣己の周囲を取巻く時は其見る物聞もの皆其僻見を抱かざるがし隨て己が五官の感觸も失亡して全く盲啞癡痴の境界に陥るとい前編に之を述べたれば今此證據を演んど欲す昔し彼の源渡の妻嬰女は容貌頗る美ありしかば或時遠藤盛遠之を親ひ見て其母に迫り白刃を閃かして之を脅かし云ふ嬰女を我に與へよ然らずんば汝を殺せんと母恐れて之に従ひ此事を泣て嬰女に語りたるに嬰女思ふやう若し此言に従はざれば母を殺さるべし又此言に従ひ不義あり寧ろ吾身を殺すに如かずとて濡髮命を授けたり此事につきて世にありふれたる草双紙の類いろ／＼の事を巧みに造り儼して連にもてやすと雖も畢竟の本意は婦女の狭き量見より母と夫を安全に守らんと欲するに過ぎざるべし此事や昔より貞婦の領の如く學者賢人も賞賛する所なれども素と大なる誤なり能く之を思へ凡そ真人ある婦人を己が武者風の勇を恃んで母を脅迫し白刃を閃かして奪いんと欲するは持凶器強盜にして強姦律を犯さんとする罪人に均ししかる大悪人に迫られたらば其真人に謀りて之を擒にすべし又は力敵のじと思ひ官に訴へて保

護を受けるも又朋友從僕など共に謀りて之を囚るもよし其罪止を得ざる場合あるに至らば首にて之を刺し通すも宜かるべし真人の何の爲のものぞかゝる非常の節之を真人に曝らすして一命を捨るとい專斷の太甚しきものと云ふべし到底死覺悟ならば盛遠を刺透すべし若し事を仕損じて却て盛遠に殺さるとあるも自ら準備して殺さるゝには優る方々あるべし又一歩を退いて後日の事を思ふべし嬰女己を殺したりとて何とて母と真人とを以て喜悅せしむるの理あらんや反てこれ無限の悲哀を興ふるものなるべし身屈にも程こそあれ勇なきも程ぞめる三人寄れば文珠の智慧も出づべきに生きて身を全うする謀事なく死して母と真人とを慰むるともなき卑屈にして一身を專斷せしと評する外に一言の語もなき次第也退て嬰女の心中を推察せば至極感れむべき事もありしと思へるれども大體の左の如く思ひたるあらんか盛遠の腕力者なり若し此言に従はざれば母は殺さるべし又之を夫に告げたりとて不甲斐なき弱もの、流されば申す丈け無益なりとて偕て身を殺すに至りたるもの歟如此ものなれば最も不届至極の女なりと云ふべし如此にして身を殺したるの一身に於ての固より益なく世間に

向ての狭量にして身命を輕んずる惡風俗を歎したりと云へし然れどもこれ亦積年の習慣によるかたし、
 は身を殺せば則足りぬと云へし、
 第一編に積年の習慣は人命を傷賊し一世も皆舉て人命を殺事也と云るハ此等の事ぞかし是れ習慣の一身を殺したる例あり又一身の誤謬は社會公衆の害惡とあるも却て孝心と心得婦道と心得居もの、誤りを證明せんとす何れの年代の事か分らざれども多分百年以來の事あるへきか下等社會の婦女中に行るゝ習慣は其父母兄弟に疾病あるか又ハ年貢租税の不納ありて之を救ふ術なき時ハ速かに身を娼妓に落して其窮厄を救ふ事あるか此際籍を以て、
 すべきあれども一代の手帳と心得父母を救濟する良策と思ふに至れる我今之を演るも秘らばしき程あり然るに茲又尤も不思議なるは世間に文學を以て任ずる諸先生が此の職業を營む者を筆誅することを爲さずして却つて某樓の何々は某の娘にして孝心ものあり孝女ありと賞賛し或ハ柳橋新誌とが新橋雜誌とど、か云ふ四角張た六ヶ破文字にて書た書物などに立派に醜業婦人共を褒賞するゝとは如何なる御心得にや一向合點の行ぬ事共あり乃積年の習慣の中に包み籠られて知らず

下等醜業社會の御仲間と申より外評する語はなし既に世の文學者にして此隨見あり何そ能下等婦人中積年の習慣を破て已に廢たる弊風を矯正するの人わらんや
 今我曹幸か不幸か此風俗廢頽の時に際會せり婦人の風俗を矯正せんと欲せば先づ世間の輿論を卑陋の地より引揚て高尚の所に推上るにあり否淫猥卑屈の積習を破るにあり積習を打破るハ一世を變動するにあり是吾矯風會の任する所あり
 ○女子勉學の説
 東京明治女學 久野しげ子
 校生徒